

稲奈西波岐神社

初の歴史書、「出雲国風土記」には、この神社についての記述がある。

稲奈西波岐神社は出雲大社の摂社で、このふたつの神社のつながりは次の有名な神話の中で語られている。稲背脛命は出雲大社で祀られている大国主命から天照大御神とその子孫への国譲りの同意を得る際に使いとして奔走した。この理由から、大国主命も八千矛神という別名で合祀神のひとつとして祀られている。さらに、出雲大社の上位の僧侶は、稲背脛命の父、アメノホヒの子孫だと言われている。

出雲大社と稲奈西波岐神社のつながりは多くの摂社の構造細部に反映されている。入口にある狛犬の姿勢は、出雲大社に関連する神社特有のものである。稲奈西波岐神社の本殿は、出雲大社同様に、仕上げ加工していない木材で建設されており、高床式で、木製の横板柵で囲まれている。出雲大社の遷宮のたびに、稲奈西波岐神社も建て直されてきた。1744 年に、出雲大社の造替から出た材料の残りが稲奈西波岐神社の改修に使われたこともふたつの神社につながりがあることを示している。

稲背脛命は天然痘治癒の神ということで知られており、神社から取った小石をひとつ服に入れて持ち歩くとこの病気を撃退できると言われている。桃園天皇（1741 年 - 1762 年）が彼の息子たちが天然痘から快復した後に感謝を込めて皇室の菊御紋付提燈二張を寄進したという記録もある。稲奈西波岐神社では毎年 10 月 8 日に祭事が行われている。